

## 安慧造中邊分別論註釋梵文寫本の數葉について

山 口 益

一、緒言、並びに大乘莊嚴經論及び辯中邊論の著者に關する安慧の傳承

二、梵文本文

三、西藏譯依用本文の邦譯

曩にシルワン・レ平教授によりて發見せられ出版せられた梵文安慧唯識三十頌註釋によりて唯識學に於ける安慧註釋の意味が特に注意せらるゝやうになり、學者或は該梵文註釋によりてその唯識學研究に啓發せらるゝところ多しとする場合もあるが、その註釋によりて護法の唯識學體系に對し安慧のそれを究明したやうな研究の成績も出ないやうである。或はその註釋が宇井博士によつて云はるゝ如く豫期程に詳細な内容を有せざるが爲に、その註釋のみによりて安慧唯識學の全體系を窺ふに足らないとでも云ふべきなのであらうか。學者によりて注意せらるゝ如く西藏所傳の論部には護法の唯識關係書の一も見られざるにその唯識關係諸論書中には安慧系の色彩頗る濃厚なるものがあるやうである。即ち右の唯識三十頌註釋には更に調伏天のそれに對する復註あり、その復註の一般

の傾向は安慧三十頌註釋に對する理解を更に確かに明瞭にせしむるものであり、梵文註釋それ自身に對するテクステュエルな究明の上にも資する所多かるべきであらうが、その復註の存すること及び同じく調伏天の觀所緣緣論註に於ける註釋の傾向が護法の釋論よりも眞諦譯無相思塵論の思想即ち安慧系のそれなることより推して、その他にも尙唯識因明に關する著述の見らるゝ調伏天論師の研究が安慧唯識學研究を補助するところ多きは云ふを待たないであらう。

併し安慧唯識の、三十頌註釋と相俟つてその最も根本的な役目を演ずるものは既に學者によりてその價值の偲ばれて居る大乘莊嚴經論の註と辯中邊論の註とであり、その二論が所謂「無相唯識」を説く點よりしてその二論の安慧註なるものは安慧唯識を窺ふに固り好箇の資料であり、此二論註中の所論と相俟つて曩の唯識三十頌註釋の所述も愈々の背景を鞏固になし得るものがあるであらうし吾人は既にその辨中邊論註相品下に於て唯識三十頌註釋中の諸文とイダンテイフイエし得る諸文に接したことである。唯識學に對する私の極めて貧弱な經驗はまだ件の大乘莊嚴經論註に參入し得るに至らないのであるが、その註の初章 (prahamādhikāra) 即ち漢譯の緣起品第一に相當する部分丈 (經疏部第四十六函、北京版にて第一八葉上の第三行まで) を概觀してみると第五葉下の第一行以下は漢譯及び梵本即ち世親註大乘莊嚴經論の復註であるから此註が最後まで此世親註の復註であることは云ふ迄もないであらう。但、歸敬偈及び始め數葉のみは梵漢藏三本の世親註論には見られざる

ものが加はりてあり、その仕方⑤は本論の無性註論の始とも略一致する。歸敬偈は且らく此を措いて長行としてのその數葉の概要を述べるならば、

「大乘の經の莊嚴の體 (garīta) は種性に住する菩薩が無上正等菩提に發心して菩薩の行を學ぶことなり。菩薩の行とは要略せば(1)何を學び、(2)云何に學び、(3)誰が學ぶかなり、(1)は自利、他利、眞實義、力、自らの佛法成熟、有情成熟、無上正等菩提の七住 (sāhana) を學ぶ。(2)は大乘法を信解し、法を求め、法を説き、法に隨つて行じ、正教授に住し、身口意業が方便に攝せらるゝことなり。(3)は種性に住せると、修正行と意樂不淨と意樂清淨と意樂未成熟と意樂成熟と不決定菩提と決定菩提と一生補處と最後有との十種の菩薩なり⑥」

と云ひ、安慧註に於ては「種性に住する」の語の解釋及び第三項等に於て無性註よりも詳細なるものあるを見ることである。此數葉の所述中その初及び(1)は世親釋大乘莊嚴經論明信品の初に、梵本と西藏本とのみに出で、漢譯には見えざる、明信品以前の諸品を攝する優陀那偈⑦

adhiḥ siddhiḥ gāraṇam gotraṇ cīte tathāiva cotpādāḥ |

svaparārtas tatvārthah prabhāvaparipākabodhiḥ ca ||

のそこに設けられたる意味を指示解釋するものとなり、(2)は是れ又業伴品の初に、同じく漢譯には缺けたる、業伴品以前の諸品を攝する優陀那偈⑧

adhimukter bahulata dharmaparyeṣṭideṣane |

prātipatis tathā samyagavivādanūcāsanam |

と業伴品を一連とする意味の示されたるものと見るべきであり、(3)は無性が功德品の第七三偈<sup>⑨</sup>

bodhisatvo mahāsatro dhiṃāṇḍ cāivottamadyutiḥ |

を引用してその項と關係せしめたることによりても見らるゝ如く、功德品の終に於ける菩薩分別十偈(Bodhisatvaviḥāge daṣa glocakā, p. 172)以下行住品の内容は菩薩相に就いての所説であるからこの第3項は本論の終を攝略するものと見るべく、又度攝品以降覺分品は菩薩の行業を説くのであるから此が業伴品の終に示す作者と業と所作との不可得なる三輪清淨の内容であり、それらの行徳が三輪清淨の具體的内容として包括せらるゝことは云ふ迄もないから、所詮如上の三項は本論所述の綱要として註釋の始めに述べられたるものであり、かく綱要を始めに略述することが無性安慧等世親以後の後代の註釋書の取る一の形式であつたのもあらう。

扱て然らばその歸敬偈は云何に。世親註の復註なる安慧註と無性註とはコルデイエ目録<sup>⑩</sup>の示す如く譯者が同じでないから、その所意は同じであるが左の如く異なる言葉にて綴られて居る。

(安慧註所出)

(無所註所出)

dkon-mchog gsum-po rin-chen gter-gyur dan || dkon-mchog gsum-po yon-tan gter-gyur-pa ||



yañ-dag c̣ḥa-ḳya-thub-sis kyi thu-bo dai ||  
 rgyal-ba bdag-nid khyu-mchog de de dai ||  
 chags-med sis-kyi gcui-la mos-pa dai ||  
 bstan-bcos gsal-ba hgro-la snan-byed dai ||  
 bla-ma grso-bo gai las hdi thos-pa ||  
 rtag-par kun-la bdag-gis sar gtugs-te ||  
 gus dai bcas-pas spyi-bos phyag-ñtshal-nas ||  
 don-la bsam-bya bdag blo blun-pa dai ||  
 bstan-bcos hdi-yi tshig don zab-pa yai ||  
 hgtel-paḥi bsam-pa bdag-la ma-byuñ-pas ||  
 de-phyir bdag-la phan-phyir cui-zad bya ||  
 c̣ḥa-kyā-thub-paḥi sis-kyi thu-bo dai ||  
 rgyal-baḥi sis gshan je dai de dag dai ||  
 thogs-med shal-sha-nas dai dei gcui dai ||  
 bla-ma gai-las btag-gis skye-bo-la ||  
 gsal-shin snan-byed bstan-bcos hdi thos de ||  
 kun-la bdag rtag ngo-bo sar gtugs-nas ||  
 she-sa dai bcas yañ-dag gus phyag-ñtshal ||  
 don bsam rnam-la blo brtul bstan-bcos hdi ||  
 tshig don zab-par rnam-bsams byad shyar-dag ||  
 bya-baḥi bsam-paḥan bdag-la hgaḥ yai med ||  
 de-ltas rañ-la phan-phyir cui-zad bya ||  
 功德藏となれる三寶と、釋迦牟尼子主と勝者子とのそれらと、無著と彼の弟と、人々の爲に明示する此論を我に學ばしめたる師長と、〔その〕總てに對して我は常に頭を地に付けて尊敬を具して稽首禮す。義を思慮せざるべからざるも、我は愚鈍にして此論の語義は而も深く、註せんとする意樂は我に起らざる故に、夫故に〔せめては〕我を利する爲に何等かを作すべし<sup>①</sup>

第三句の勝者子(jinaputta)は安慧註にては勝者を體とせるものゝ主(jināmaṇvisabha?)であり、從つてこれは後に見ゆる辯中邊論の歸敬偈にある sugataṃjā 善逝體所生と同様の意味の語であるから此「勝者子」は彌勒を指示し、勝者を體とせるものゝ主即ち佛子の主たる點よりして註(6)に引用の句中に出づる如き一生補處の當來佛としての彌勒であり、夫故に上の歸敬偈には此論註の傳承する人師として釋尊と、當來佛の彌勒と、無著と、その弟(世親)並びに此論を正しく無性又は安慧に傳授したる師長とが連らねられたことである。更に、時代は下るから史料としての價值は薄らぐかは知らぬが利他賢の「經莊嚴始め二偈の釋」に「五濁時の毘舍遮の爲に衆生の資糧の心無くなる時、彼〔佛法〕の義解了し難き故に〔佛法の〕效果無くなる如くなるを見て、それを容易く解了せしめん爲に彌勒世尊は聖無著をして論師世親に向ひて一切〔有情〕が隨攝せられん爲に彼(佛法義)を説示する此莊嚴經論を説かしめたり」との記事は無性、安慧の時代より印度佛教の後代に到るまでも印度に於て此莊嚴經論の著作として彌勒菩薩と無著と世親とが算へられて居る一傳統の有りしことを示すものと認めるべきであらうか。

然らばそれら三師によつて云何にして大乘莊嚴經論が現在の如く著作されたか。それは上の利他賢の言葉によりて多少言ひ表はされては居るが、その著作に關して三師が掲げられて居ると云ふその情景から考へて、その關係は、より具體的には吾人が下に掲げる辯中邊論安慧註の指示する處の

如くに解釋せらるべきものでないであらうか。即ち下に示さるゝ如く安慧は、辯中邊論初頭の世親作歸敬偈「稽首造此論善逝體所生及教我等師」を解釋するに當り、此論の造者 (draṣṭṛ) を清淨の眞如より又は眞如中に起れる善逝體所生なる一生補處の彌勒菩薩とし、聖彌勒の攝受加持よりする法の相續によりて此論を現前し、語れる (vyākhyāna) 說者 (vaktṛ) 即ち漢譯の「教我等師」を無著となし、世親は無著より此論を聽きて註釋を造るとなすものである。此によりて辯中邊論は、先の大乘莊嚴經論も、言葉として初めて偈の説かれたるは無著より世親に向つてであり、世親がその言葉となれる偈を釋したとなすのが安慧の傳承する處であるが、こは慈恩が辯中邊論述記に於て歸敬偈を解釋する處に述べる點と一致するものであり、漢譯大乘莊嚴經論序に李百藥が「大乘莊嚴論者無著菩薩纂焉」と述べたることも如上の解釋に立脚して頗る意味のあることと思はれ、圓測の深密經疏卷四に莊嚴論頌是慈氏、釋即世親、共成一部とあり、割註に舊相傳云無著菩薩造者謬也とて本論の著作に關して無著を除外視せるは西藏譯の無性、安慧の傳承するところとは相違せる說である。

私は上來唯、大乘莊嚴經論と辯中邊論との著作者に就いて西藏譯中に於けるかゝる資料を紹介したまでに止まり、此資料に由つて所謂彌勒無著の著書に關してその著作者一般の問題にまで敢えて推及せんとするものではない。現今としては之をなす爲のそれら關係諸論書の漢藏對照による文献上の精査、諸論書所述の教理の組織系統を攻究することが更に要請せらるゝからである。

但私としては宇井教授が「史的人物としての彌勒及び無着の著書」中に論せられた大乘莊嚴經論と辯中邊論との著者のみに就いては、宇井教授が無著を此から省かれたに對して、如上の安慧の傳承を更に考慮して此點を再吟味すべきでないかを欲ふものである。而して安慧の言及する所謂一生補處の彌勒については、宇井教授の所論に依れば、無著や世親すら既に彌勒を將紹種智法王位又は善逝體所生等と云つて當來佛位にまで崇敬したのであるから、時代の次第に隔れる安慧に於ては彌勒は地上の人師とは認められない程にまで崇められたのであるとの解釋が下され得るであらう。

辯中邊論の安慧註は彌勒の頌に安慧が註したやうにも云はれて居るが、後に見らるゝ如くそれは爾らずして世親の註せる、現行漢譯二本の如き論書の復註である。西藏本に於て約百五十葉より成れるものであるから西藏本の大乗莊嚴經論の世親註論と略その量を同じくし従つて漢譯にすれば十三卷程の書である。三卷の本論に對して十三卷に互る註釋であるからその註の詳細なること推して知るべく、その一斑は下に記した第一品第一偈の註釋に由つても推知せらるゝであらう。固り全部の偈及び長行に對してその第一品第一偈に於ける如き詳細な註釋はないのであるが、所要の論點についてそれと同様な詳釋のあることは最後の無上品に到るまでも變はる處はない。漢譯二本の本論と西藏譯本論とを此安慧註によりて讀みゆくとき、慈恩の述記中の舊譯に對する批難の當れると當らざる等の點が此安慧註によりて標準づけられること、相品十六空の下の安慧註の文が本論より十八

空論への一過程中にあるものなること等は本註の苟且な概観によりても知らるゝ處である。

本稿掲げる所の安慧註中邊分別論梵文寫本はシルワン・レヰ教授が一九二八年日本より歸佛の途次ネパール王朝にて見出されし梵文寫本の複寫本の一部、即ち同年十月レヰ教授が歸巴せられて約三ヶ月後にネパール王朝より複寫の上レヰ教授の下へ送り届けられた複寫本の一部である。當時私は西藏譯本註を中心として西藏譯本論漢譯二本の本文研究を一應終つた時であつたのでレヰ教授にその旨を述べ當時同じくレヰ教授の許にありし印度プーナ (Poona) 大學のデイヴェカル (Divakar) 氏と共に教授の許可を得てその複寫本數葉を筆寫したことであつた。而して複寫本の續きは最近全部ネパール王朝よりレヰ教授の許へ送り届けられたので、それは又吾人の複寫すべく轉送せらるゝ由レヰ教授の近信によりて知ることを得た。先に到着筆寫せるその複寫本の一部につき日本の學界へ報告するやうにとは昨春以來レヰ教授より慇懃せられて居たことであり、最近の通信によりて至急それを果すやうにとの指示を受けたので茲に極めて粗漏ではあるが右梵本寫本を西藏譯に依りて讀み、種々の都合上第一品第一偈下の註釋までを發表することゝ致した次第である。その複寫本は他のネパールより將來の寫本の如く黄色光澤紙にデーヴナーガリー (各頁八行) を以て寫され、見らるゝ如く各行共に殘缺して殊に第一葉は殆ど一斷簡でしかない。その寫本は西藏譯と對照することによりて前後の文脈が形成せらるべきであらう。第二葉の始め二、三行まではレヰ教授が、コレジュ・

ド・フランスに於ける講義の放課後二、三回に互り、西藏譯に由りて假に梵文の殘缺せる部分を補はふとせられた一範例を参照して補記したのであるとは云ひ條、私が括弧「」中に設けたものは何れも西藏譯語を自分の解釋上假に梵語で表はしたまでの極めてプロヴィゾアルな試でしかなく、自分としてもそれをより良く成す爲に近く到着すべき寫本の續業によりて本註の用語に多少の經驗を増すであらう日に更に手を加ふべきことを期して居るが、若しそれ逸早く諸先進によりて此點につき教示せらるゝ機會がありとすれば誠に望外の幸である。

今はとにかく西藏譯を底本として讀み得たる一端を示して此安慧註の極めて一斑を紹介し、シルバン・レギ教授の此書發見の功を學界に示すことに馳せ參じたことである。

#### 註

- ① 字井伯壽著印度哲學(第五)頁一四〇
- ② Vinṭadeva: Trīṇikakāṭikā, Bṣṭan-ḥgyur, Mdo-ḥgerel, Tome 61, 1-69, 高楠博士の安慧註三十頌唯識論の譯に參照せられたる跡見え、河口慧海氏は日本宗教大講座中の唯識論に於て本註を參照して居られる。
- ③ 一九二九年一月—三月のシュルナル・アジヤタイク(Journal Asiatique)中の拙稿「觀所緣緣論」Ālambanaparīkṣāの中に依用す。
- ④ 調伏天の唯識學に關する書として注意すべきものは註②に述べたるもの、他に (1) Prakaraṇa-viṇṇakāṭikā (Mdo-ḥgerel, LVIII, 201-232), (2) Tāntṛānārasiddhiṭikā (CVIII, 1-21), (3) Nyāya-binduṭikā (CXI, 1-43), (4) Saṃbandha-parīkṣāṭikā (CXII, 1-26) のある、シュルデイエ目録中に見ゆるものである。(1)は世親の唯識二十論註の復註であるが安

安慧造中邊分別論註釋梵文寫本の數葉について

慧の三十頌註に復註したる調伏天さしてはその立場は固り安慧の系統なること云ふ迄もない。此書は佐々木月樵著「唯識二十論の對譯研究」の註に於て私の屢々引用したるところである。(2)はロシア佛教文庫の第一九卷として出版せられてあり、法稱の「他相續成就論」の註であるが、その論の第一條に「若し自らに於ける身の所作(ārambha)と語の語るもの(ābhāsa)とが、行ばんとし言ばんとする思を先させるものなることを人は見るが故に、それらの事柄を他相續中にも見ることに由りて心の動き(vegāsa)を隨度するならば、此方法は唯心論(cittamātravāda)に於ても同じきが故に唯心論も亦他の相續を隨度し得」とは明かに唯識教に於ける他相續の心の問題を論ずるものであらうから、此論の調伏天註が又唯識學に關係するものなることは勿論であらう。(3)はプサン教授の校訂によりて一九〇七年印度文庫中に出版せられて居る。此書は専ら現量と隨量との説示に關するものであるから唯識學プロパーの問題よりも純因明に關するものと思はれる。(4)については私はまだ參見するの機會を得ない。

⑤ *Mahāyānasūtrālaṅkārikā*, Nāgārjuna, XLV, 45—196 コルデイエ目錄第三卷三七六頁所出。此註釋の體裁を一瞥するに世親釋の如く偈を全部掲げてそれに對して註釋を施すこと云ふ仕方ではないやうである。少くとも初品の始め三偈の如きは偈句を全部見出さない。第二偈の如きはそれに對して五葉にも亙る詳釋のあることである。その註釋中には固り世親註の文と一致する處もあるが、全體の葉數から見えて一々の偈と世親註とにいくの如く詳釋を施しては全部に行き亙るべきでないから此註釋は世親註の復註ではなく、詳論を要すべき點だけを註釋してゆく、云はゞ論題中心の註と見るこゝが出来来る。

⑥ 此處の第(3)は(1)、(2)に於ける如くその意を言ひ表はすやうな優陀那偈と一致させることによつて簡明にそれを解釋するこゝが出来来る、此(3)に列舉せらるゝ名目の内容が本論の菩薩行住品等の終の部分に説かるゝ内容と内容上一致すべきものであることを認めたいのであるから、此(3)に列舉せらるゝ各名目の内容的説明を安慧註によりて譯述する。

「(一)種性に住せる(*gotrasthita*)は無上菩提の種子のみありて未だ菩提心を發せざるなり。(二)種性に依りて菩薩の所學を學ばん爲に菩提心を發して菩薩の戒に住せるは修正行(*pratipanna*)と稱せらる。(三)彼修正行せるものが未だ初歡喜地に入らず信解行地に住する間は意樂不清淨(*avipradhāya*)と稱せらる。(四)初地に入りてより七地に至るまでは意樂清淨(*vipra-*

adhiṣṭhāya) と云ふ。(五)彼意樂清淨なるものが究竟なる第八地と第九地に未だ入らざるまでを意樂未成熟 (āparipakvācāya) と稱す。勉力 (ābhoga) と努力 (vratā) と有るが故なり。(六)第八地と第九地に入りたる時は意樂成熟 (paripakvācāya) と稱す。勉力と努力となきが故なり。(七)彼成熟したるものが王子 (yuvārjān) として決定地なる第十地に未だ入らざる間を不決定菩提 (anīyata-bodhi) と稱す。(八)第十地に入り畢りては決定菩提 (niyata-bodhi) と稱す。(九)(十)決定菩提せる彼第十地の菩薩に又二種あり。一生補處 (ekajñāpātibaddha) と最後有 (anābhava) となり。一生補處は此生に於て無上覺せず、此生を過ぎて餘世に於て無上覺す、例へば聖彌勒の如し。最後有は、その生に於て無上覺す、例へば一切義を成熟せる菩薩の如し。

⑦ 梵本第五〇頁所出。西藏譯經疏部第四四函北京版にて第一七三葉下所出。

⑧ 梵本第九七頁所出。西藏譯右と同函本、第二二二葉上所出。

⑨ 梵本第一七四頁所出。西藏譯右と同函本、第二七四葉下所出。無性註論(註⑤に關説)第四六葉上に所出。

⑩ 無性註大乘莊嚴經論については註⑤参照。譯者は Galyasimha と Grikuta。安慧の大乘莊嚴經論註は同じくコルデイエ目録第三卷第三七六頁所出。Sūtrāṃkāra-viṭṭhāṣya. Mdo-igrei, XLVI, XLVII, 譯者は Municaundra と Bira-cis(Maṅgala)。

⑪ 對照すべき梵本も漢譯も、將又、それに對する註釋もなき西藏譯偈は、私の如き西藏語學に未熟なる輩には容易に解釋し難き場合が屢々あることである。今の偈についても安慧註の第四、五の兩句に解釋し難き點あるによりてその點は無性のそれに從ふことをする。

⑫ 利他賢 (Parahitabhadra) はコルデイエ目録にも指示せらるゝ如く Parahita と同人であるから、ターラナートハ史(シフエル譯頁二二五、六、寺本教授譯頁三〇五)に依る限り法上 (Dharmotara) よりも尙半世紀以上も後の人であり、法上はキース (Keith; Buddhist philosophy) によれば九世紀と云ひ、マッソン・ウルクマン (Masson-Oursel, La philosophie comparee) は八四七年とも定めて居るから、大體九世紀の人なるべく、從つて利他賢は九世紀の終又は十世紀の初頭の出世か。

利他賢の「經莊嚴始め二偈の釋」はコルデイエ目録第三卷第三七六頁に示さるゝ「Sūtrāṃkāra-dīloka-dvayavādyāna」の引用せる文は、丹珠爾部經疏第四八函、北京版にて第二葉下にある。

安慧造中邊分別論註釋梵文寫本の數葉について



[sñigs-na lñahi dus-kyi 'ca-zas sems-can-gyi tshogs-kyi shñin-po med-par-gyu-pahi tha-ma deñi tshé deñi don rtogs-par dkañ-ba-ñid-kyi-phyir lñus-bu med-par gyur-pa lla-bur yan-dag-par gziḡ-nas de bde-blog-tu rtogs-par bya-bahi-don-du] lñhags-pa thogs-med-kyi sgo-nus slob-dpon dbyig-gñen-la ched-du grad-nas thams-cad rñes-su gzuñ-bar bya-bahi phyir de ñe-bar ston-pahi bstan-bcos ndo-sde rgyan ces-bya-ba ñdiñ beom-ldan-ñdas byams-pas ñe-bar bstan-pa yin-no ||

- ⑬ 稽首造此論、善逝體所生、卽正歸敬彌勒尊者、及教我等師者、卽世親我兄無著菩薩也。無著於彼慈能尊所、旣先得已、便教世親、世親造釋。

- ⑭ 宇井伯壽著、印度哲學研究第一卷。同教授は Zeitschrift für Indologie und Iranistik, Band 6 Helt 2, Leipzig 1928, On the Author of the Mahāyāna-sūtrālaḡkāra に於て同じく本論が註は彌勒、釋は世親であることを論證して居られる。此論文を私は宇井教授の紹介によりて金倉圓照教授の所藏書を借覽することを得た。茲に記して謝意を表する。

- ⑮ 本論註の西藏譯は、北京版はコルデイエ目錄(第三卷三七八頁)の示す如く、經疏部第四十八國第一九葉下第七行—第一七〇葉下第八行。ナルタン版は同國第一八葉下第四行—一六四下第一行。

北京版は大谷大學圖書館所藏寺本教授將來本を依用し、ナルタン版は今は大谷大學にも所藏せられてあるが私の依用したのは巴里ギユイメ博物館所藏本である。

下記梵文中原寫本の第一葉は極めて斷簡的なるもの故にイタリツクの  
數字を以て殘存せる行數を示す

# 〔Madhyāntavibhāgaṭikā

Āryamañjuçriye kumārabhūṭāya namaḥ ॥

uttamajanā hi prāyaṣo gurave' dhiṣṭadevāya ca namaskṛitya  
karmā)(1, 1)su pravartanta ity ayam apy [aham uttamajana)m  
anuvartti madhyāntavibhāgabhāṣyaṁ cikīrṣur [iti jñāpanārtham]  
tatpraṇetur vaktuḥ ca pūjām [kṛtvā<sup>(3)</sup> tadarthavibhāgaṁ saṁpra-  
yukta iti pratipādayann āha

çāstrasyāśya praṇetāram ityādi |

evaṁ kṛtvā ko guṇo labhyata iti cet | guṇavato hitakāriṇaḥ  
ca pūjayāne<sup>(4)</sup> (2) puṇyam upacīyate | [puṇya upacite bhū]  
tārambhād vighnavināyākair anupahatān alpēna prayāsenā samā-  
payantīti | atha vā (3) praṇetīpraṇeya[vakṛtvākyayoh samā-  
dāna<sup>(6)</sup>]pravacanāt sūtra[praṇetīvakṛtvīritiṣu gāuravotpādanār-  
tham

çāstrasyāśya praṇetāram

iti sarvaṁ āha | tatra praṇetrā vyākhyātum upadiṣṭāt sūtre

1) Ms. pravarttata. 2) Ms. ayam apa さあるも Tib. に bdag-la yaṁ ḥdi さあるが此に相當すべきものなれば apa |I apy aham さ續くものなるべし. 3) Ms. cikīrṣas tat なるが Tib. にてI tatpraṇeya の出づる次前に shes çes-par bya-baḥi-phyir さある故に itijñāpanā<sup>o</sup> を設けたり. 因みに Tib. の如く此處の pravartate 以下を緩らば, pravartate madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṁ cikīrṣur ity ayam apy aham uttamajanam anuvartti itijñāpanārtham なり. 4) Ms. yeṣām なるが Tib. の yontan-daṁ ldan-pa daṁ phan-ḥdogs-la mchod-na さ云へる mchod-na に對してI pūjayāne を配當せしむべきが如し. 5) Ms. °nārambhā<sup>o</sup> さ云ふ. Tib. に bsod-nams ḥphel-na yaṁ-dag-par rtsom-pa さあれば bhūtārambh<sup>o</sup> さなるべし. 6) Tib. にI mdsad-pas gsuṁs-pa daṁ | ḥchad-pas bçad-pa yaṁ-dag-par byin-par さある故に praṇeya の次に來るべき語として此括弧中の一句を加ふべきが如し.

gāurava)m utpadyate | yasmād asya kārikācāstrasyāryamāitreyah  
praṇetā<sup>(1)</sup> sa cāikajā<sup>(2)</sup>[tipratibaddhād bodhisattvābhijñādhāraṇi-  
pratisamvitsamādhīndriyakṣāntivimokṣāṇi sarvāṇi satyapāramito  
bodhisattvabhūmiṣu sarvāsu niḥṣeṣaṁ prahīṇāvaraṇaḥ |  
vaktṛisamādānadvāreṇa vṛittyāṁ] (4) gāuravam utpadyate |  
vāktātrācāryāsaṅgas tasmāc chru<sup>(3)</sup>[tvācāryabhadanta-  
vasubandhunāsyā vṛittiḥ kṛitāḥ | tāyoḥ cobhayata uttama-  
prajñāvato' bhrāntāvabodhagrahaṇanirdeṣasāmarthyād atra sūtrīr-  
tho' bhrāntam uddiṣṭa iti vṛittyāṁ gāuravam utpadyate | evaṁ  
yeṣāṁ pudgalaḥ pramāṇaṁkṛitas<sup>(5)</sup>] (5) teṣāṁ [sūtravṛitti]gāuravot-  
pattiḥ | yeṣāṁ ca dharmācṛitas teṣāṁ sūtravṛittyoh ṣubhārthe  
'vagate niḥcaye jāte' yaṁ praṇetrivaktṛipratityā prabhāvitō na  
tu tarkāgamamātreṇa prabhāvita iti praṇetre ca vaktre ca gāura-  
vam utpadyate |

i) (6) dam idānīm [prakāṣitavyaṁ kīdṛiṣaṁ cāstrasva]  
rūpam<sup>(6)</sup> | cāstraṁ kiṁ [ceti nāmavacanākṣarasamudāyapra-  
bhāsā vijñaptayaḥ cāstram | atha vā lokottarajñānaprāpakaḥ  
viṣeṣaprabhāsā vijñaptayaḥ cāstram | kiṁ vi] (7) jñaptayaḥ<sup>(7)</sup>

1) Ms. yasya. Tib. ḥdi-ltar. 2) Ms. sa cāikaja.....[i Tib. にて[i de yaṁ  
skye-ba gcig-gis thogs-pa なれば是れ樹博士翻譯名義大集 806 に出づる語にして、  
ekajāti.....なる a [i長音なり。 3) Ms. vaktṛa.....cāyāsaṅgas なり。 Tib. には  
ḥdi-la ḥchod-pa-ni slob-dpon thogs-med-do さあると、先の praṇetā が nominative に  
て出でたる例さにより vaktā なる nominative にして Tib. の如く atra の続くものな  
るべく、cāya [i ā] cārya なること言をまたす。 4) Ms. chu.....なれど、Tib. に de-  
las slob-dpon btsun-pa dbyig-gñen-gyis gsan-nas さあるを以てなり。 5) Ms. には  
teṣāṁ の次前に.....bhās さあるも理解し難し。 Tib. [i gañ-dag gañ-zag tshad-  
mar byed-pa de-dag なり。 6) この Tib. [i da-ni bstan-bcos-kyi rañ-bshin ci-  
ḥdra-ba dañ ciḥi phyir bstan-bcos ṣes-bya-ba ḥdi bḥad-par byaḥo なり。 7) Ms.  
jñaptayā. Tib. rnam-par rig-pa rnam ji-ltar.

prañiyanta ucyante vā | prañetṛivaktṛivijñaptiprabhavatvāt prajñā-  
 ptinān<sup>(3)</sup> nā[tra doṣaḥ | dhārmikaṣiṣyo hi ṣīlasamādhīprajñā-  
 viṣeṣeṇotpāditatvāt kāyavānūmanasān saṁbhārānutpattikarmaṇo  
 nivartate saṁbhārotpattikarmaṇi ca pravartate | atha vā] (8)  
 cāstralakṣaṇo[papannatvāc chāstram |] yad upadeṣo bhāsamān-  
 [o'bhyastaḥ] savāsarakleṣaprahāṇam ā[padyate] nirantaradīr-  
 ghavi<sup>(6)</sup>[citratīvraduḥkhabhayād durgatitaṣ ca bhavāc ca saṁtrā-  
 yate tac chāstralakṣaṇam | tasmāt kleṣaripuṣaṇād bhavadurgati-  
 saṁtārāc ca] (2, a) cāstralakṣaṇam | etac ca dvayam api  
 sarvasmin mahāyāne sarvasmiṁc ca tadvyākhyāne vidyate  
 nānyatreṭi | ata etac chāstram | [tatr]āha ca |  
 yac chāsti ca kleṣaripūn aṣeṣān  
 saṁtrāyate durgatito bhavāc ca |

1) Ms. prañiyante 2) prajñapti 施設は vyavahāra 言説と同義に用ひらる。而して Tib. はここには ñan-paḥi rnam-par rig-pa さあり、ñan-pa は辭書にては mñan-pa となるものにして中論第三品第九偈 (Prasannapadā Madhyamakavṛitti, p. 120) にては mñan は crotavya なれば今も梵文寫本の prajñapti は Tib. にては crotavya-vijñapti さありしなり。 3) Ms. nā.....lpaṣāsanācchāstra さあり。此處が ḥdi-la ñes-pa med-do. にて始まれる Tib. を見れば Ms. nā.....の次後には atra doṣaḥ なること明らかならぬ、次の Ms. ....lpaṣāsanāc chāstra 云々に至つては Tib. 中此に相當すべきもの見出されず。乃ち pravartate に至るまでの Tib. を示せば slob-ma chos-pa-ni tshul-khrims dañ tiñ-ñe-ḥdsin dañ ṣes-tab-kyi khyad-par bskyed-paḥi phyir | lus dañ ñag dañ yid tshogs par mi-ḥbyuñ-baḥi las-las bzlog-pa dañ | tshogs-par ḥbyuñ-baḥi las-la ḥjug-paḥo || なればなり。 4) Ms. bhāsamāna sarva なれば Tib. には luñ mnos-pa goms-par byas-pas bag-chags dañ-bcas-paḥi さあり。若し此に由れば bhāsamāna の次に abhyasta あるべく、sarva は savāsana なるべし。 5) Ms. prahāṇāya.....なるが Tib. spoñ-bar ḥgyur なれば prahāṇam āpadyate さ加へらるゝものなるべし。 6) Ms. dīghavi.....Tib. yun-rin-poḥi sdug-bsñal drug-po sna-tshogs なる故に vi[citra] さ續く。 7) Tib. によりて tatra を加ふ。

tac chāsanāt[trāṇa]guṇāc ca cāstram  
e[tad dvayaṁ cānyamateṣu nāsti<sup>(1)</sup>||]  
[asyeti triyānadvāreṇa saptaabhāvasaṁ]grahasya kleṣajñeyāvaraṇa-  
prahāṇaprāpakasya madhyāntavibhāgakārikācāstrasya hṛidi-  
sthitatvād asyeti pratyakṣopadeṣaḥ | praṇetāram iti<sup>(2)</sup> kartāram |  
yady apy ayaṁ dhātuḥ prāpaṇārthas tathāpi “pra”ṣabda-  
sa[ṁprakāṣitaḥ karaṇaṁ] draṣṭavyaḥ | uktaiḥ hi<sup>(3)</sup>  
upasargeṇa dhātvartho balād anyatra nipate |  
gaṅgāsālimādhuryaṁ sāgareṇa yathāmbhasā ||  
<sup>(4)</sup>sugatātmajam iti suṣṭhugataḥ savāsanakleṣāvaraṇāj<sup>(5)</sup> jñeyāvaraṇā-  
[ca cā]prati[ṣṭhitanirvāṇa iti sugataḥ |<sup>(6)</sup> sa ca sarvavāsanāvaraṇa-  
prahīṇaḥ sarvathā sarvadharmābodbodhasvarūpaḥ sarvavibhūty-  
ācārayabhūtaḥ [cintāma]ṇiratnavad acintyaprabhāvavigrahaḥ sarva-  
sattvānām anābhogena sarvārtha[ka]raṇasamartho nirvikalpaka-  
jñānaviṣeṣātmakaḥ sugataḥ | [tadātmatvaṁ viçuddhitatthā] ||  
<sup>(8)</sup>tajjanitatvān nirvikalpasya jñānasya | tasmāt tasmīn vā jātaḥ  
sugatātmajaḥ | atha vā sugatātmanā jāta iti sugatātmajaḥ | yatho-  
ktaṁ<sup>(9)</sup> sūtrāntare jāto bhavati tathā[gatavaṁ]ṣe tadātmakavastu

1) Ms. の缺けたる部分に Prasannapadā nāma Madhyamakavṛti ti (P. 3) 所掲の偈によりて加ふ。 2) Tib. にハ ṣabda に相當する語の次に dan srog-s-na byed-par とあり。 3) Ms. にハ此前半偈なし。 Tib. により Prasannapadā nāma madhyamakavṛtti (p. 5) に由りて加ふ。 4) Ms. にハ此處に半行に相當する文あり。されど Tib. に由る 限り、そハ此處にあるべからずして p. 193 に當てられたる位地にあるべし。 5) Ms. ハ āvaraṇāj の代りに aprahāṇāj とあるも Tib. によりて訂正す。 6) Ms. にハ唯 prati...taiḥ ni.....とのみ存す。 7) Ms. にハ rtham savāsana とあり Tib. によりて訂正す。 8) Ms. javita なれど、rab-tu byun なる Tib. に由る。 9) Ms. ハ jāo とあり。

[pralabhya | evaṃ sati bodhisattvo daṣamabhūmāu prasthitaḥ]  
 sarvākāraṃ jñeyaṃ vastu karatalastham ivāmalakāṃ<sup>(1)</sup> tattvaṃ  
 çukāvaccāhāitalocanasyevābhāsaṃ āyāti | bhagavataḥ punar  
<sup>(3)</sup> apanītalocanāvaraṇasyevety ayaṃ viçeṣaḥ | [atra hi nir-diṣṭaṃ]  
 sugatātmajas [tasyaiva çāstrapraṇayanasyāvabodhasaṃpad lābha-  
 satkāranirape]kṣasya [ca] çāstrapraṇetṛitvena karuṇāsaṃpat  
 prajñāsaṃpac c[eti] |

vaktāram iti vyākhyānasya kartāram | abhyarhyeti saṃbadh-  
 yate | sugatātmaja ity apīty apare | sa punar āryāsaṃgaḥ<sup>(4)</sup> |  
 [tasminn idaṃ çāstraṃ sāksātkṛitaṃ vyākhyātaṃ cā]<sup>(5)</sup> ryaṃāitre-  
 yādhiṣṭhānād dharma[samītanena]<sup>(6)</sup> |

[ceti] samuccaye pādapūraṇe 'dhikavacane vā | anyān api  
 buddhabodhisattvān arcayitvā na kevalaṃ praṇetāraṃ vaktāraṃ  
 ceti | kebhyo vaktāram<sup>(7)</sup> 'asmādādibhya iti vayam ādir yeṣāṃ te  
 'smadādayas<sup>(8)</sup> tebhyo<sup>(9)</sup> 'smadādibhyaḥ | anenā[tmāno' mṛṣopadeço  
 bhāsamāno nir-diṣṭaḥ |]

<sup>(10)</sup> abhyarhyety<sup>(11)</sup> abhyarcya | abhīti purataḥ sāksād iva sthītaṃ<sup>(12)</sup> |  
 arhitvā<sup>(10)</sup> arcayitvā kāyavānmanobhiḥ | [çāstrasya praṇetāraṃ]  
 (2, b) vaktāraṃ cābhyarcya kiṃ kariṣyasīty āha |

1) Tib. になし. 2) 此語 Tib. 中此に相當すべきものなし. また, その意味理解し難し. 3) Ms. apanīja. 4) Ms. āryasaddharma なれど Tib. に由りて訂正す. 5) Ms. にい此括弧中の一行に相當すべきところに單に……ti……とのみ殘存す. Tib. によれば括弧中の如く緩らるべきか. 6) Tib. rgyun-gyis に由る. 7) Ms. asmā (sma) dādibhya. 8) Ms. にい asmād さ ā (長音なり). 9) Ms. にい ayagraha なし. 10) p. 192 註 4) に注意したる一行 (abhyarhyety—manobhiḥ) は Tib. に由るにこゝに来るべきものとす. 11) Ms. abhitaḥ. Tib. mñon-par shes-bya-ba-ni 12) Ms. sthīatam.

<sup>(1)</sup> yatiṣye 'rthavivecane | yatnam ārapsye <sup>(2)</sup> 'rthavivecane <sup>(3)</sup> 'rthavivarane prīthagbhāvakarane vetiyaṃ <sup>(4)</sup> ca nimittārthāsaptamī | arthavivecananimittam ity arthaḥ |

[artha iha cāstraçarīram iti <sup>(5)</sup> ete saptārthā asmiṃ cāstra uddiṣṭā iti vacanāt | kim idaṃ cā]straiṃ praṇītaṃ budhānāṃ bhagavatāṃ samyagnirvikalpajñānotpādanārtham | dharmanāirātmyadeçanatayā nirvikalpajñānotpādāt tadabhyāsac ca niḥçesasavāsanakleçajñeyāvaraṇaprahāṇam [avagamyate | vipakṣam uktam <sup>(6)</sup> dharmanāirātmyaṃ ca sarvadharmarahitatā dharmanāirātmyam <sup>(7)</sup> antarvyāpārapuruṣavyatirikatā ca dharma]nairātmyam ity atas tatpratiṣedhena tathābhūtanāirātmyapratipādanārtham cāstrārambhaḥ |

lakṣaṇāvaraṇādiṣv apratipannavipratipannānāṃ samyagavabodhotpādanād apratipattivi[pratipattyapanayārtham ity anya āhuḥ |

atha vā lokadhātusattvadharmavineyo <sup>(8)</sup> pāyavālvātmake [pañcākārajñeye <sup>(9)</sup> pratyekam anantaprabhedatvād <sup>(10)</sup> durvijñeyam <sup>(11)</sup> iti bodhisattvānāṃ yaç cīttasaṃkocas tadapanayanārtham āha | lakṣaṇam hy āvṛttis tattvam iti |

tatrāditaḥ cāstraçarīravysthāpanam | [iti tatreti cāstrā-

1) Ms. yatiṣye artha.° 2) Ms. ārapsye | arthavivecane なれど Tib. によりて訂正. 3) Ms. °vivecane artha.° 4) Ms. iti 無し. 5) Tib. samyag 無し. Ms. samyagvinirvikalpa の vi は過剰. 6) Tib. thabs-kyis bdag-ñid-de さありて vāhva に相當する語なし. 7) Tib. çes-bya rnam lha. 8) Ms. prabhava. Tib. rab-tu phyé. 9) Ms. m 無し. 10) Ms. cine. Tib. sems-pa. 又 Ms. °kocaḥ. (11) Ms. vyavarasaṃksepah なれど Tib. の rnam-par bshag 並びに後に出づる例によりて訂正す.

rthāvivecane cāstre vā | ādita iti prathamam eva | cāstre<sup>(1)</sup> nide-  
 ṣaḥ | tasya cārīraṁ samāso vā] piṇḍārtho vācra<sup>(2)</sup>yārtho vā  
 cārīram | yathā hi bāhyādhyātmikāyatanācra<sup>(3)</sup>yaḥ kāyaṁ cārīram  
 ity ucyate | evaṁ yān arthān ni<sup>(4)</sup>ṣṭitya cāstraṁ pravartate te te<sup>(5)</sup>  
 'rthās tasya cārīram | te ca saptā[rthā lakṣaṇādayaḥ | vyavasthā-  
 panam iti prajñaptir ucyate 'vyākhyānam ityarthāḥ | nanu cāst-  
 rāvagamane<sup>(6)</sup>ṇā]va tac cārīraṁ vijñāsyata iti nirarthakam ādāu  
 tadvyavasthāpanam | na nirarthakaṁ cīṣyānugrahārthatvād gatā-  
 rtho hi cīṣyaḥ sukhaṁ vistaram ucyamānaṁ pratipadyate | dṛi-  
 ṣṭā bhūmiḥ niḥcaṁkaṁ<sup>(7)</sup> svavāda [nānyatheti | ete saptārthā asmiṁ  
cāstra uddiṣṭā iti cāstra<sup>(8)</sup>cārīra]samāptyarthaḥ | eta iti ye lakṣa-  
 ṇādaya uddiṣṭāḥ | sapteti saṁkhyā paryantādhigamārtham  
 upādānam | arthyanta ity arthā adhi gamyanta iti yāvat | asmiṁ<sup>(9)</sup>  
 cāstra iti madhyāntavibhāgasamijñake | u[ddiṣṭā iti nirdiṣṭā vā  
 niṣcitā vā | tathā hīti tadarthapratipādananipātaḥ | lakṣaṇam iti]  
 lakṣyante 'neneti lakṣaṇam | tac ca dvividhaṁ saṁkleṣalakṣaṇaṁ  
 vyavadānalakṣaṇaṁ ca | tatra saṁkleṣalakṣaṇaṁ navavidham |  
 abhūtaparikalpō<sup>(10)</sup>sti

ity ārabhya yāvat

1) Ms. ācayārthena. Tib. gnas-kyi don-ni. 2) Ms. °naṣṣayaḥ. 3) Ms. kāya.  
 Tib. 〔 °gnas-ni khog-pa-ste | 4) Ms. niṣṭitya. 5) Ms. te artha. 6) Ms.  
 vijñāsyate iti. 7) Ms. cīṣya. 8) svavāda ては意味通ぜず。acāvāha iva さあるべ  
 きか。 9) Tib. に於ては此一文二行先にある samāptyarthaḥ の次にあり。而して  
 Tib. にては yāvat の代りに tha-tshig-go (ityarthāḥ) なり。 10) Ms. 〔 °kalpyāsti  
 さあれど Mahāyānasūtrālaṁkāra の p. 59, 第 15, 第 17 偈にある例、並びに Triṇḍika-  
 vijñaptibhāṣya の p. 35 に引用せられたる辨中邊論偈の例により、又後にもそれら二  
 例と同形なるものが原文文中に見出さるゝこともあり。



saptadhābhūtakalpanād

iti | <sup>(1)</sup> çeṣeṇārdhena vyavadānala[kṣaṇaṁ nirdiṣṭam | yadi lakṣyante  
'neneti lakṣaṇam ucyate' evaṁ lakṣaṇasya saṁkleṣavyavadānabhe-  
daḥ syād iti cen nāitad (3, a) e]vam | svabhāva eva hi bhāvā-  
nāṁ lakṣaṇam | tadyathā pṛthividhātuḥ [khara]lakṣaṇo na ca  
[khara]tvāt pṛthividhātuḥ pṛthag astīti | atha vā lakṣyate tad  
iti lakṣaṇam | evaṁ hi saṁkleṣo vyavadānaṁ ca saṁkleṣavyava-  
[dānātmatvena lakṣyata iti lakṣaṇam | atha vā dvayoḥ saṁkle-  
ṣavyavadānayoḥ lakṣaṇaṁ dvidvidhaṁ svalakṣaṇaṁ ca sāmānya-  
lakṣaṇaṁ ca | <sup>(2)</sup> āvaraṇam ity ayam āvṛṇoti kuṣalān dharmān | vri-  
yante <sup>(3)</sup> vānena <sup>(4)</sup> kuṣaladharmā utpattivartatvād ity āvaraṇam |  
tat punas tripañcācatprākāram | tattvam iti tad evedaṁ tat |  
tasya bhāvas tattvam [aviparyāsa ity arthaḥ | tac ca pañca-  
daṣaprakāram | vipakṣaprahāṇārthaṁ pakṣaḥ pratipakṣaḥ | sa mār-  
gaḥ | tadabhyāso bhāvanā | avasthā tasyāiva saṁtānenotpatti-  
viṣeṣaḥ | sā punar ekānnaviṁṣatiprakārā gotrāvasthādikā |  
phalasya lābhaḥ <sup>(5)</sup> phalaprapṛtiḥ | tat punaḥ pañcadaṣaprakāram  
vipāka[phalādikam | yānānuttaryam <sup>(6)</sup> iti gamyate 'neneti yānam |  
tad yānaṁ cānuttaryaṁ ceti] yānānuttaryam | tat punas trivi-  
dhaṁ pratipattiyā[nuttaryā]di | saptamo<sup>(7)</sup>rtha <sup>(8)</sup> iti niyamārtham  
<sup>(9)</sup> anukramārthaṁ cāha | <sup>(10)</sup> etāvanta evārthā nirdiṣṭyante nāto'nya iti |

1) Ms. adhena. 2) Ms. にい ayam なし. Tib. の shes-bya-ba ḥdi-ni に據る.  
3) Tib. によりて vā を設く. 4) Ms. vivarttvād. 5) Ms. prāptes. 6) Ms.  
ānantaryam なれど Tib. の bla-na med-pa に由り ānuttarya なるべし. 7) Ms.  
にい avagraha なし. 8) Ms. anukta.° 9) Ms. nirdiṣṭyanta. 10) Ms. にい  
avagraha なし.

anukramaḥ punar ayaṁ l[okottarajñānānukūlartham | evaṁ hi  
 bodhisattvenādhimukticaryābhūmivyavasthitenā cīlaprasthitenā  
 prathamāṁ saṁkle]<sup>(1)</sup> cavyavadānakuṣalena bhavitavyam | tataḥ  
 kuṣalānāṁ dharmānāṁ yasya yad āvaraṇaṁ tasya taj jñeyam |  
 tasyāprahāṇaṁ<sup>(2)</sup> vimukter asaṁbhavād avijñānaṁ ca prahātuṁ  
 na cakyate doṣādarṇanāt | [tatas tasmād āvaraṇād yenāmbanena  
 cittam vimucyate tat tattvaṁ veditavyam | tatas tenāmbanena  
 tad āvaraṇaṁ ye]na prayogeṇa kṣayo bhavati sā pratipakṣa-  
 bhāvanā jñeyā | tatas tasyāṁ pratipakṣabhāvanāyāṁ vipakṣahā-  
 nyā pratipakṣavṛddhyā vāvasthā jñeyā gotrāvasthādikā | tato  
 lokottaradha[rmah<sup>(3)</sup> sāksātkrītaḥ phalāni | srotāpannaphalādiko  
 veditavyaḥ | sarvam etad uttarayogād] bodhisattvānāṁ [cṛāva-  
 kādisādhāraṇam |] yathoktaṁ sūtre sa pravrajitaḥ<sup>(4)</sup> cṛāvakaṇṇikṣā-  
 cāragocarasamudācāram api<sup>(5)</sup> cīkṣate pratyekabuddhaṇṇikṣācāra-  
 gocarasamudācāram api cīkṣate bodhisattvaṇṇikṣācāragocarasamu-  
 dācār[am api cīkṣate | bodhisattvānāṁ tv ānuttaryam asādhāra-  
 ṇam | saptamo' rtha ānuttaryam |

anya āha |] saṁklecavyavadānalakṣaṇe kāuṣalotpādanārtham  
 ādāu lakṣaṇam | tatra yaḥ saṁklecāś tad āvaraṇam | yad vyava-  
 dānaṁ tat tattvaṁ | āvaraṇaprahāṇaṁ ca tattvādhiḡamād bhava-

1) Ms. saṁkle]sa. 2) Ms. aprahāṇān なれどこの Tib. に de ma-spañs-na  
 rnam-par grol mi-srid-la | rnam-par mi-ces-na yañ さあり aprahāṇān [I avijñānam  
 と文章上の位置對同して有るべきものなり. 3) Ms. に[ va.....さあるも hjiḡ-  
 rten-las ḡdas-paḡi chos なる Tib. に由るさき[ dharma の來るべきこと疑無し.  
 4) Ms. pravrajinaḥ なり. Tib. rab-tu byuñ-ba に由る. 5) Ms. cīkṣyate なれど  
 も次に來る例もあり, Tib. に由る

tīty ata āvaraṇatattvam | tat prahā<sup>(3)</sup> b)ṇopāyapradarṣanār-  
 tham [tataḥ saparivārapratipakṣo mārgaḥ | tasya mārgasyādi-  
 madhyānteṣv alpamadhyamahatprabhedam nirdeṣanārtham] tatrā-  
 vasthā<sup>(1)</sup> | avasthānurūpam<sup>(2)</sup> phalam āvahatīti tadanantaram phala-  
 lam<sup>(3)</sup> | etac ca sarvam bodhisattvasya ṣṛāvakādisādhāraṇam ity  
 asādhāraṇamahāyānanayaprakāṣanārtham<sup>(4)</sup> yānānuttaryam iti |

[apara āhuḥ | sadasadlakṣaṇajñāpanārtham prathamam lak-  
 ṣaṇam ākhyātam | lakṣaṇam jñātvāvaraṇam prahātavyam tattvam  
 ca sāksāt]kartavyam iti tadanantaram āvaraṇatattvam | tayoḥ ca  
 prahāṇasāksātkaṇayor ayam upāya iti pratipakṣabhāvanā | tas-  
 yāḥ<sup>(5)</sup> ca tāratamyam avasthāviṣeṣaḥ | tatas tatprahāṇam<sup>(6)</sup> phalanam |  
 ta[danantaram yānānuttaryam iti pradarṣitam ity ayam anukrama  
 iti |

anyac ca cittam sadasaddharmasammohād apavādasa]mā-  
 ropaprahāṇārtham<sup>(7)</sup> lakṣaṇanirdeṣaḥ | prahāṇasammohasya āvara-  
 ṇakāuṣālārtham<sup>(8)</sup> āvaraṇam | tenāvṛitam<sup>(9)</sup> tattvam iti tattvakāu-  
 ṣālārtham tadanantaram<sup>(9)</sup> tattvam | tattvapratipattibhāvanayā-  
 [varaṇam prahīyata iti tattvānantaram<sup>(9)</sup> pratipakṣabhāvanā | tat-  
 prabhedakāuṣālārtham avasthā | avasthayā phalam prabhinnam]m  
 ity avasthānantaram<sup>(9)</sup> phalam tatkāuṣalotpādanārtham | sarvam

1) Ms. [1 avasthānurūpam なれど Tib. の gnas-skabs dan·mthun-pa に由る。

2) Ms. āvahanīti. 3) Ms. samūrva, Tib. thams-cad に由る。 4) p. 196 註(6)

に同じ。 5) Ms. に[1 tatas は想像して tat を読み得る形にあり。 tat [1 teṣa とあり、此れ或[1 tāiḥ ca の誤ならんか、今[1 Tib. に des-spañ-bar bya-ba とあるに由りて tat とあることの自然なるを思ひ、tat を認めたり。 Tib. に[1 tatas に相當すべき語なし。 6) Ms. pālanam と云ふも Tib. hbras-bu とあるに由る。 7) Tib.

[1 rmoñs-pa spañs-nas とある故に Ms. の prahāṇa より prahīṇa を適當とすべし。 8) Ms. tana, Tib. des に由る。 9) Ms. prativimūva とあれども Tib. rab-tu-rtogs-

pa [1 pratipatti を示すものと認む。

etan mahāyānam āgamyata<sup>(1)</sup> iti yānānuttaryam ante nirdiṣṭam<sup>(2)</sup> [iti manyate] |

tatra lakṣaṇam ārabhvāha

abhūtaparikalpo<sup>(3)</sup>'sti dvayaṁ tatra na vidya[te] |

[cūnyatā vidyate tv atra tasyām api sa vidyate || iti ||

iti tatreti lakṣaṇāvaraṇādisaptabhāvagrahaṇamadhye<sup>(4)</sup> [la]kṣaṇam adhi<sup>(5)</sup>[kṛi]tyoddiṣyāha |

abhūtaparikalpo<sup>(6)</sup>'sti

ityādi | yathoddeṣas tathā nirdeṣa iti kṛtvā lakṣaṇaṁ ca prāg<sup>(7)</sup> uddiṣṭam<sup>(8)</sup> atas tasyāiva<sup>(9)</sup> cṣebhyo nirdeṣaḥ prāg ārabhyate |

ke cid viru<sup>(10)</sup>[ndhanti sarvadharmāḥ sarvathā niḥsvabhāvaḥ caṣaviṣānavad ity ataḥ sarvāpavādapratīṣedhārtham āha

abhūta<sup>(11)</sup>]parikalpo'sti

[iti | ] svabhāvata<sup>(12)</sup> iti vākyaṣaḥ | nanv evaṁ sūtravirodhaḥ<sup>(13)</sup> sarvadharmāḥ cūnya iti sūtre vacanāt | nāsti virodhaḥ<sup>(14)</sup> yasmād

dvayaṁ tatra na vidyate

abhūtaparikalpo<sup>(14)</sup> hi grāhyagrāhaka[svarūparahitāc chūnyam ucyate

1) Ms. āgamyeti. 2) Ms. antarnirdiṣṭam, Tib. tha-mar bṣad-do | 3) Ms. parikalpyāsti を訂正すること先に出る如し. 4) [la] は Ms. にも括弧中にあり. 5) Ms. には adhi tpo と云ふ. Tib. に brtsams-nas dbaṅ-du mdsad-de とあるに由り adhikṛitya と認めたり, (榊博士翻譯名義集 7633). brtsams-nas-ārabhya に相當するものはなし. 6) Ms. parikalpya ity とあり, Tib. に yod あり又註 3 と同じ. 7) Ms. yathodeṣas Tib. bstan-pa に由る. 8) Ms. uddiṣṭam. 9) Ms. nirdeṣaḥ なり. Tib. bṣad-pa に由る. 10) [ndhanti] を假設したれど, Tib. にはこれに相當する語なし. Tib. によれば sñam-du sems-pa なれば manyante なり. 11) Ms. parikalpyāsti なり. 訂正すること先に屢々出づる如し. 12) Ms. svabhāvataḥ. 13) Ms. cūnyā. 14) Ms. parikalpyādi なれど yasmāt にて連接せる偈の註なれば di は hi なるべし. kalpyā は先數例の如く kalpo たるべし.

na tu sarvathā niḥsvabhāvaḥ | ato na sūtravirodhaḥ | yady  
 evaṁ dva<sup>(1)</sup>yaṁ <sup>(2)</sup>ṣaṣaviṣāṇavat sarvathā nāsti'abhūtaparikalpaḥ ca  
 paramārthataḥ <sup>(3)</sup>svabhāvato'sty evaṁ <sup>(4)</sup>ṣūnyatābhāvaprasaṅgaḥ |  
 nāitad evaṁ yasmāc

chūnyatā vidyate tv atra |

iyam eva hi <sup>(5)</sup>ṣūnyatā yā grāhyagrāhakarāhitatā[bhūtaparikalpa  
 iti na <sup>(6)</sup>ṣūnyatā nāstitvaṁ bhavati | yady advayaṁ <sup>(7)</sup>ṣūnyatā tac  
 cābhūtaparikalpe' sti kathaṁ vayam a)muktā vidyamānāḥ kas-  
 mān na grīhṇata iti saṁṣayāpanayanārthaṁ

tasyām api sa vidyata

ity āha | yasmāc <sup>(8)</sup>chūnyatāyām <sup>(9)</sup>apy abhūtaparikalpo vidyate  
 tasmād bhavanto na muktāḥ | ata eva ca samalatvān na [yuktam  
 avagantuṁ prasannābdhātuvat |

atha vā cittacāittāḥ | ye rūpaṁ dravyatvabhāvaṁ ca paṣ-  
 yanti tatpratiṣedhārthaṁ]

(4, a) <sup>(10)</sup>abhūtaparikalpo'sti | [ity āha  
<sup>(11)</sup>sa evāsti] dravyataḥ | nāsti rūpaṁ tadvyatiriktaṁ [nāsti] drav-  
 yata iti | kiṁ kārāṇaṁ yasmād

dvayaṁ tatra na vidyate

na hy abhūtaparikalpaḥ kasya cid grāhako nāpi kena cid grīh-  
 yate 'kiṁ tarhi' grāhyagrāhaka<sup>(12)</sup>[rahitabhāvamātram eva | evaṁ

1) Ms. ṣavisāṇa. 2) Ms. parikalpyaḥ. 3) Ms. stv. 4) Ms. ṣūnyato なれ  
 ぞ Tib. の stoṅ-pa-ñid med-par による。 5) Ms. °rahetutā なれぞ Tib. の med-  
 pa-ñid による。 6) Ms. muktāḥ. 7) Ms. vidyamānā. 8) Ms. adhyabhūta  
 なれぞ Tib. に stoṅ-pa-ñid-la yaṁ さあるに由る。 9) Ms. kalpā. 10) Ms.  
 kalpāsti. 11) Ms. に [daṇḍa なくして dravyato なり]。 12) Ms. grāhakatvaṁ  
 なれぞ Tib. ḥdsin-pa daṅ bral-baḥi なれば rahita が直ちに續くものなるべし。

hi na vijñānabāhyaṁ rūpādini gṛīhaynte svapnādāv iva vijñānaṁ  
rūpādyā]bhāsam utpadyate | na ca yady asya kāraṇaṁ tad-  
abhāve tasyotpattir yujyate | tasmān nirālambanam eva svapnā-  
dāv ivānya trāpi svabijaparipākād arthābhāsaṁ vijñānam ut-  
padyate'ity avaseyam | grāhyā[bhāve grāhakābhāvaprasaṅga iti  
grāhyābhāve grāhakāsaṁbhavaḥ | tasmād na rūpam abhūtapari-  
kalpāt pṛithag asti | ] yadi tarhi grāhyābhāvas tena viçuddhyālam-  
banābhāvān mokṣābhāvaḥ | nāitad evaṁ yasmāc

chūnyatā vidyate tv atra

"tu"çabdo yasmādarthaḥ | <sup>(1)</sup>çūnyatā hi viçuddhyālambanā sā ca  
<sup>(2)</sup>grāhya[grāhakarāhitatābhūtaparikalpe'stīti na mokṣābhāvaḥ |  
yady abhūtaparikalpe'stī sā vi]dyamānā kim arthaṁ na gṛī-  
hyate | abhūtaparikalpāvṛitatvān na gṛīhyata <sup>(3)</sup>ākāṣanāirmālyavan <sup>(4)</sup>  
na tv asattvād iti pratipādayann āha

tasyām api sa vidyata iti |

atha vā sarvāpa[vādapraṭiṣedhārtham

abhūtaparikalpo'sti

ity āha | na sarvābhāvo nātmatvabhāvaç ca vijñāna]pariṇāmāt-  
<sup>(5)</sup>manāstīti kṛtvā | ye tu manyante yathāiva rūpādayaḥ prakhy-  
āyante tathāivābhūtaparikalpāt svabhāvataḥ <sup>(6)</sup>pṛithag vidyanta iti  
tān pratyāha abhūtasamāropapra[<sup>(7)</sup>ṭiṣedhārtham

tasyām api sa vidyata iti |

abhūtaparikalpamātraṁ vidyata ity abhiprāyaḥ | kena cid dvayam

1) Ms. çūnyatā. 2) Ms. grāhyā.....'ཀུལ་ཤིང་' Tib. gzuñ-ba dan ḥdsin さあるに  
由る. 3) Ms. gṛīhyate. 4) Ms. °malyavat. 5) Ms. pariṇāmātmanā asti. 6)  
Ms. vidyata. 7) Ms. °āropaḥ pra.....

a)<sup>(1)</sup>bhāvo vandhyāputravac<sup>(2)</sup> chedarūpo grihyate anyāir antarvyā-  
pārapuruṣarahitatā<sup>(3)</sup> dharmānām cūnyatety ucyate | ataḥ cūn-  
yatāpavādapratīṣedhārtham bhūtanāirātmyakhyāpanārtham [ca

cūnyatā vidyate tv atrety āha |

yady abhūtaparikalpe cūnyatāsty evam sarvaprāṇinaḥ prayatna-  
syānupayujyamānasya mokṣapra)saṅgaḥ | nāsty etad yasmāt<sup>(4)</sup>

tasyām api sa vidyate<sup>(5)</sup> |

na hy aviṣodhitāyām<sup>(6)</sup> cūnyatāyām<sup>(7)</sup> mokṣo'sti saṁkṣiṣṭaḥ<sup>(8)</sup> ca mahatā  
yatnena viṣodhyata it. nāsty ayatnena mokṣaḥ |

atha vā [na saṁkleṣavyavadāna)<sup>(9)</sup>]lakṣaṇam saṁl[āpād anyo'  
stīti tataḥ saṁkleṣavyavadānalakṣaṇapratipādanārtham āha |

abhūtapari)<sup>(10)</sup>(4, b)kalpo'sti

iti vistarāḥ | abhūtaparikalpasvabhāvaḥ saṁkleṣo bhrāntalakṣa-  
ṇatvāt | katham etat taj jñātavyam bhrāntam lakṣaṇam iti yena

dvayam tatra na vidyate

svātmanāvidyamānena grāhyagrāhakākāreṇa prakhyān[ād bhrā-  
ntasvarūpeṇābhāsate | idanīm vyavadānasvarūpapratipādanārtham

cūnyatā vidyate tv ātrety āha |

cūnyatāsvabhāvo hi vyavadānam dva)yābhāvasvabhāvatvāt |

1) Ms. bhāvā. 2) Tib. dños-po med-do shes chad-paḥi ño-bor さ云ふ故に vad.  
iti chedarūpa. 3) Ms. rahitā なれど Tib. med-pa-ñid さあり. 4) Ms. etadasmāt.  
Tib. ḥdi-ltar. 5) Ms. vidyateḥ. 6) Ms. adhiṣodhitāyām. 7) Ms. mokṣosti.  
8) Ms. saṁkṣiṣṭāca. 9) Ms. [ī vā lakṣaṇam saṁl.....さあるも, Tib. に由り  
て括弧中の na saṁkleṣavyavadāna を加ふ. 10) Ms. \*kalpāsti. 11) Ms. trānte  
さ云ふ, Tib. ḥkhrul-ba に由りて訂正す. 12) Ms. ātmanam なれど Tib. bdag-  
ñid-du に由る. (13) Ms. ākāraṇa.

atra ca çūnyatā prabhāvitatvād<sup>(1)</sup> mārganirodhayor api grahaṇam<sup>(2)</sup>  
 veditavyam | saṁkleṣapakṣād<sup>(3)</sup> eva vyavadānapakṣo mārgayitavyo  
 na punaḥ pṛithaksvatantram astiti pradarṣanā[rtham atrety āha |  
 yadi na dvayam asti katham sā vidyamānā loko bhrānta iti  
 praçne tataç ca |

tasyām api sa vidyata ityāha  
 grāhyagrāhaka]vikalpaḥ<sup>(4)</sup> | hastyādyākāraṁ çūnyam māyāyām<sup>(5)</sup>  
 iva hastyākārādayaḥ | abhūtam asmin dvayaṁ parikalpyata iti<sup>(6)</sup>  
 anena vety abhūtaparikalpaḥ |

abhūtavacanam na ca yathātra parikalpyate grā[hyam grā-  
 hakaṁ vā tathāstity upadarṣayati | parikalpavacanam na yathā-  
 rthaḥ parikalpyate tathārtho vidyata iti nirdeṣa]yati | evam  
 asya grāhyagrāhakavinirmuktaṁ lakṣaṇam paridīpitaṁ bhavati |  
 kaḥ punar asāu | atītānāgatavartamānā hetuphalabhūtās trāi-  
 dhātukā anādikālikā nirvāṇaparyavasānāḥ [saṁsārānukūlāc citta-  
 cāittā aviṣeṣeṇābhūtaparikalpaḥ | viṣeṣatas tu grāhvagrāhaka-  
 vikalpaḥ | tatra grā]hyavikalpaḥ<sup>(8)</sup> 'arthasattvapratibhāsam vijñā-  
 nam | grāhakavikalpa ātmavijñaptipratibhāsam | dvayaṁ grāh-  
 yaṁ grāhakaṁ ceti<sup>(9)</sup> tatra grāhyam rūpādi | grāhakaṁ cakṣur-  
 vijñānādi | grāhyagrāhakabhāva[rahitā viviktatā hy abhūtapari-  
<sup>(10)</sup>

1) Ms. 'bhāvitatvāt. 2) Ms. grāhaṇam. 3) Ms. pṛithak tatvamasyāsti さある  
 も Tib. の rañ-gi rgyud gud-na med-par に由る. 4) Ms. vikalpyā. 5) Ms.  
 çūnya. 尙此處の一行の文を Tib. の如くに示せば, māyā hi hastyādinā çūnyāpi  
 hastyādyābhāsam iva | なり. 6) Ms. kalpyeti は次に來るべき vety に相對稱せ  
 して訂正し得. 7) Ms. yathārtham なれど Tib. に artha に相當すべき語なく  
 して ji-ltar hdi-la さあり. 8) Ms. asya, °Tib. don. 9) Tib. に由りて iti を加  
 ふ. 10) Ms. 'bhāvaḥ なれど, Tib. に dños-po dan bral さあるを以て rahita 又  
 は vyaticikta を續かしめ得.



kalpaçūnyatā<sup>(1)</sup> 'na punar abhūtaparikalpābhāvaḥ | yathā rajjuḥ  
sarpasvabhāvena<sup>(2)</sup> [çūnyā] 'tadaśvabhāvatvāt sarvakālaṁ çūnyā na  
tu rajjuḥ<sup>(3)</sup> svabhāvena 'tatthehāpi | tasyām api sa vidyata iti 'abhū-  
taparikalpāḥ | evaṁ hy āgantukāvaraṇapakīṣṭatvāt tad agra-  
ha-<sup>(4)</sup>nam uktam [ābdhātadvādivad iti | evaṁ yasmin yad nāsti tat tena  
çūnyaṁ samanudriçyata iti | kiṁ kasmin nāsti | abhūtaparika]  
lpadvayam<sup>(5)</sup> 'ato'bhūtaparikalpaṁ dvayena çūnyaṁ paçyati | yat  
punar atrāvaçiṣṭam<sup>(6)</sup> tat sat<sup>(7)</sup> 'kiṁ punar ihāvaçiṣṭam<sup>(8)</sup> 'abhūtaparikal-  
paḥ çūnyabhāvaç ca | tad ubhayam ihāsti 'ity anadhyāropāna-  
pavādena paçyati [yathā bhūtaṁ prajānāti | tatrābhūtaparikal-  
pasyādvayadarçanād anadhyāropaḥ | abhūtaparikalpasya çūnyatā]  
(5, a) yāç cāstitvadarçanād anapavādaḥ | aviparītaṁ çūnyatā-  
lakṣaṇam udbhāvitam bhāvati<sup>(9)</sup> 'yac chūnyaṁ tasya sadbhāvāt<sup>(10)</sup>  
yena çūnyaṁ tasya tatrābhāvāt | 'sarvabhāvaḥ sarvabhāvo vā tu  
viparītaṁ çūnyatālakṣaṇam<sup>(11)</sup> 'çūnyatāyā evābhāvaprasaṅgaḥ | (na  
çūnyasaṁjñāyām asati çūnyatā sambhavati dharmatāyā hi bhā-  
vīyattatvād anityatvādivat | dvayam astīti cet<sup>(11)</sup> 'çūnya)tābhāvaḥ |  
yadi çaçaviṣāṇakalpanena dvayaṁ kathaṁ tenābhūtaparikalpasya

1) Ms. sarpasvabhāvanā さあるも Tib. sprul-gyi dños-pos に由る. 2) Ms. tat-  
svabhāva° なるも Tib. dehi ran-bshin-ma-yin-pas なれど a の否定詞あるべし. 3)  
Ms. cakṣuḥ, Tib. thag-pa. 4) Ms. uktaṁ. 5) Ms. ato abhūta°. 6) Ms. ava-  
çiṣṭaḥ. 7) Ms. °bhāvaḥ なれど Tib. kun-rtog dañ stoñ-pa-ñid-do による. 8)  
Ms. paçyatya..... 9) Ms. sarvabhāvasarvabhāve tu na なれど na ありては一文の  
意味成り難く、又 Tib. に由れば thams-cad med-pa ḥam thams-cad yod-pa-ni さあ  
ればなり. 10) Ms. prasaṅganna. Tib. は單に ḥgyur-ro にして ḥgyur-baḥi phyir-  
ro さはなし. 11) Ms. tanā°. Tib. des.

çūnyatāsaṁbhavo' nyena hy anyasya çūnyatā dṛṣṭā<sup>(1)</sup> 'yathā bhi-<sup>(2)</sup>  
 kṣubhir vihārasthāne tad evaṁ 'yathā rajjur māyā vā svātmanā-  
 vidyamānena sarpākāra<sup>(3)</sup> [puruṣādikalpanena prabhāṣati tatra kas-  
 ya cid grāhanivartanārthaiḥ sarpapuruṣādina<sup>(4)</sup>] çūnyety ucyate |  
 evaṁ abhūtaparikalpo<sup>(5)</sup> 'pi svātmanāvidyamānena grāhyagrāhakā-  
 kāreṇa prakhyāmāno<sup>(7)</sup> bālānāṁ tadgrāhābhiniveçatyājanārthaiḥ<sup>(6)</sup>  
 dvāyena çūnyam ity ucyate |



1) Ms. caksur なれど Tib. thag-pa. 2) Ms. ātmanyavidyamāna なれど Tib.  
 bdag-ñid-kyis med-par. 3) Ms. sarvākārā..... 4) Ms. çūnye の次前は cca あ  
 れども Tib. に於てその來るべき跡を見出し難し. 5) Ms. parikalpāpi. 6) Ms.  
 grāhyāgrā.° 7) Ms. prakhyāmānā.

左記邦譯中括弧（）中の數字は西藏譯北京版の葉數、〔〕中のはナルタン版のそれを示す。此邦譯は吾人が梵文寫本を讀むに當り依用せる西藏譯の語調にそのまゝ從へる所多し。

## 中邊分別註釋 論師安慧造

（聖文殊師利童子に歸命す）

①、〔以下は辯中邊論卷上の劈頭「稽首造此論 善逝體所生 及教我等師 當勤顯斯義」の註釋〕

勝れたる人々は、多く、師長と所樂の天とに尊敬を作して諸作業に處し、中（中）邊分別經を釋せんと願ふ故に我も亦勝人に從ふものなりと知らしめん爲に彼〔經論〕の著作者と說者とに供養を作して彼〔經論〕の義を分別することに關與したるなりと示さんとして〔註者世親は〕

此論の著作者に

云々と言へり。かくの如くなして人は云何なる功德を得るか。〔曰く〕有德者と利益を作す人とに供養するときには福德増上す。福德増上するときには、正行するが故に障礙によりて害せられざる人々を少しの努力を以て成滿せしむ。或は又、著作者の作るどころと說者の語るところとが手始として語らるゝが故に著作者と說者と經と註とに尊敬を生ぜしめんが爲に

此論の〔19a〕著作者に

どの凡てを說けるなり。その中著作者によりて說かるべく指示せられたるが故に經に尊敬は生ず。

何故なれば此論偈の著作者は聖彌勒なり、彼は一生補處の故に菩薩の一切の神通と陀羅尼と無碍辯と三昧と力と忍と解脱とによつて妙彼岸に到り、菩薩の一切地に於ける障を殘無く斷じたるものなり。說者の始むる處に従つて註に尊敬は生ず。こゝに說者は軌範師無著なり。軌範師大德世親は彼〔無著〕より聞きて此〔論〕の註を作りたり。彼〔無著と彌勒〕二人ともに最上慧を具するに由り誤無く了達し、執持し、說示する能ある故に、こゝに經の義は誤無く說示せられたりとして註に尊敬は生ずるなり。かくの如く人(a, b)を量とする人々には經と疏とに尊敬の生ずることあり。法に依れる人々が經と疏との妙義を了達し、判決の生じたる時、こゝには著作者と說者とに對する信知によりて表明せられたるものありと雖も、究理と聖言とのみによりて表明せられたるものあるにはあらずとて著作者と說者とに尊敬は生ずるなり。

今云何なるか論の自性たり、何故に論と稱せらるゝか、このことを說かざるべからず。名と語と字との聚として顯現する表識は論なり。又は出世間智を得せしむる聲の差別として顯現する諸表識は論なり。諸表識は云何に作られ、語らるゝか。著作者と說者との表識より所聞の表識起るが故に此處に過失は無し。具法の弟子は戒定慧の差別として生ぜしめらるゝものなる故に、身語意が資糧として起らざる業よりは止息し資糧〔19, b〕として起る業に於ては起行す。又は論の相たり得る故に論なり。教が思察せられ修習せられたるときに習氣を具する煩惱が斷せらるゝことゝなると、又

無間に長き種々なる激苦に由りて怖畏られたる惡趣と有とより衛らるゝとは是れ論の相なり。されば煩惱の賊を征し惡趣の有より守る故に論の相なり。そは兩ながら一切の大乗とそれを宣説する處に有りと雖も餘處には無し。夫故に此は論なり。夫について人は言へり。

諸煩惱の敵を殘無く統治し

惡趣と有と(21.2)より衛るものは

統治と守護の功德との故に論なり

此は兩ながら他宗中には無しと。

「此の」と云ふは、三乘によりて七相を攝し煩惱と所知との障を斷つことを得る此中邊分別偈論が「註者世親の」心に住する義に由りて「此の」と云ひて現前に指示するなり。「著作者に」と云ふは作者になり。此語界(語根なる<sup>三</sup>)は「得る」「導く」の義あるものなれども、而も <sup>De</sup> の聲と共に讀むとき「作す」の義あるものと見るべきなり。實に次の如く言はれたり。

界(語根)の義は接頭辭によりて強いて他處に引き下らさる。

恒河の水の甘味が「大海に達する時」海水によりて「甘味の變ずる」が如し。

善逝體所生と云ふは、習氣を具する煩惱障と所知障とより、不住涅槃へ極善に逝けるが故に善逝なり。又彼れ一切の習氣の障を斷ち、一切種に於て一切法を了悟する自性有り、一切自在の所依と

なり、如意寶珠の如く不可思議力を具し、一切有情の一切の利益を無功用に作す力あり、無分別智<sup>④</sup>をその特殊なる體とせるは善(善)逝なり。彼〔善逝〕の體は清淨の眞如なり。無分別智はそれより起れるが故に、それより、又は、そこに生じたるは善逝體所生なり。或は又善逝として生じたる故に善逝體所生なり。餘經中に説かれたるが如し「その體法を得て如來の種族に生じたり」と。かくの如く(21, b)なるときは、菩薩第十地に住せるとき、所知物は凡て掌中に在る菴摩羅果の如く〔眞如〕<sup>⑥</sup>薄衣にて覆はれたる眼に見ゆるものゝ如し。然し世尊には眼の覆の除かれたるものゝ〔所見〕の如しとかくこゝには差別あり。茲に善逝體所生は此造論のみを思ふことの圓滿なるものなりと示され、利養と恭敬とに相因らざるところに著作者性としての悲圓滿と慧圓滿とありと示さるゝなり。

説者には「演説の作者に」なり、「尊敬して」と〔の句と〕結合せらるゝなり。或者は言ふ、善逝體所生なりとも稱せらるゝ。然るに彼〔説者〕は聖無著なり。彼〔無著〕の上に聖彌勒の攝受よりする法の相續によりて此論は現前せられ説かれたり。誰の爲の説者になるか。

我等が爲にと云ふ。我を始めとせるものは我等なり。此は、我には教を不虛誑に心に印象することありと示すなり。

及びと云ふは集むるか偈句を填補するか又は誇張する語かの場合に於てあり。著作者と説者のみ

ならず、何れの佛菩薩にも尊敬してとなり。<sup>⑦</sup>

現敬してとは尊敬してなり。「現」とは面前に現前にの如く存するなり。「敬して」は身語意を以て尊敬してなり。論の作者と説者とに〔20, 5〕現敬して汝は何を爲さんとするかと云はゞ、「註釋者は」言へり。

義を分別するために勤むべしと。義を分別する爲に、義を解釋する爲に、或は明瞭になす爲に我は努力を始むべしと云ふは、これ因の義〔を示す於格〕なり〔22, 2〕。義を分別する故にこの意味なり。<sup>⑧</sup>

(2)、「以下は辯中邊論卷上の中」此中最初安立論體、頌曰

唯相障眞實 及修諸對治 卽此修分位 得果無上乘

論曰、此論唯説如是七義、一相、二障、三眞實、四修諸對治、五卽此修分位、六得果、七無上乘「文の解釋」

〔上に義を分別する爲めにと云ふその〕義はこゝには論の體なりと云ふはこれら七義は此論中に説かるゝなりと述ぶるが故なり。何故に此論は作られたるか。〔曰く〕諸佛世尊の〔正〕無分別智を生ぜん氣が爲めなり。法無我の説示を以て無分別智を生ずると、又彼（無分別智）を修習することに由つて習氣を具する煩惱と所知との障を殘無く斷することを得るなり、又法無我を、一切法の無性が法無我なり又内作の士夫の無性が法無我なりとて相違論は語らるゝが故にそれ（らの相違論）を遮するこ

とによりて法無我を實の如く指示せん爲に論を始むるなり。

餘者曰く。相と障等を解了せず又邪に解了せる人々に、正解を生せしむることによりて不解と邪解とを除かんが爲なりと。

又は、世界と有情と法と所化と方便とを體とせる〔それら〕五種の所知には各に又無邊の差別有る故に知られ難しとて諸菩薩に怯弱の心あるとき、それを除かん爲に相と障と眞實云々と説けり。

その中初めに論の體の安立ありと云ひ、その中と云ふは論の義を分別する中、又は論に於てなり。「初めに」と云ふは最初になり。「論」は所説なり。彼〔論〕の「體」は、要略、聚集の義又は所依の義〔<sub>22</sub>, b〕は體なり。例へば内外の處の所依は身、〔<sub>21</sub>, a〕體と云はるゝ如く、その如く或義に依つて論が存するとき、彼々の義は彼〔論〕の體なり。而してそれらは七義なり。相等なり。「安立」と云ふは施設と稱せらる、説と云ふ義なり。論を解了するによりてこそ彼〔論〕の體は知らるべきにあらずや夫故に初めに彼〔體〕を安立することは無意義なり〔と人云はゞ此に答へて曰はん〕諸弟子を利益するが故に無意義にあらず。何故なれば、弟子が義を了解するときには廣く説かれつゝあるものを容易に了解す。馬場の示されたるときは懼無くして馬を驅るが如し。此に異りては爾らず。

これら七義が論中に説かれたりと云ふは論の體圓滿すとの義なり。〔論の〕意義が示さるゝ故に意義が了解せらるゝとまで〔意味する〕なり。七と云ふは數なり。〔凡ての方面に及べる了解の義を枚舉



するなり。』これらと云ふは相等の示されたるなり。此論中にとは中邊分別論と名けらるゝ〔此論に於て〕なり。説かれたりと云ふは説示せられ、設定せられたるなり。かくの如くと云ふはその義を解了せしむる言機なり。相と云ふは此によりて表相せらるゝ故に相なり。彼相は又二種、雜染相と清淨相となり。その中雜染相は九種なり。

虚妄分別有り<sup>⑭</sup>

と云ふより

七種は虚妄分別よりす

と云ふに至るまでなり。所餘の半分によりて清淨相は説かれたり。(23c)若し此によりて表相せらるゝ故に相なりと云はるゝならば、爾らば相は雜染と清淨との二の差別有るべしと人云はゞ、それは爾らず。何故なれば諸法の自性こそは相なり。(21b)例へば地界の相は堅なり、堅性より地界は別になきが如し。或は又それが表相せらるゝ故に相なり。何故ならばかくの如く雜染と清淨とは雜染と清淨との自體によりて表相せらるゝ故に相となる。又は雜染と清淨との二の中に相は二種なり。自相と共相となり。障と云ふはこれ諸善法を障ぐ、又は此によりて諸善法は障げらる。〔諸善法の〕生を排除する故に障なり。そは又五十三種<sup>⑮</sup>なり。眞實と云ふは彼こそ正に此なるは彼(眞)にして、彼(眞)の體は眞實なり。不顛倒の義なり。そは又十種なり。相違を斷つ爲の方は對治にして、そは

道なり。それを修習するは修なり。分位は彼(修)が相續して生ずる差別なり。そは又十五種にして種性の分位等なり。得果は果を得るなり。そは又十五種にして異熟果等なり。無上乘と云ふは、此によりて去く故に乘なり。そは乘にして又無上なる故に乘の無上なるなり。そは又三種、行無上等なり。

第七義と云ふは決定義と次第義(さだまゝ)となりと人は言へり。〔決定義は〕此量の義が茲に説示せられ、それより餘他〔の説かるゝ〕にはあらざるなり。然るに此次弟〔義〕は出世間智と相應するが爲なり。何故なれば勝解行地に住し戒に安住する菩薩は初めに雜染と清淨とに通曉せざるべからず。その次に諸善法のそこに障となれるものを知らざるべからず。彼〔障〕を斷たざるときは解脱はあり得べからざる故に、又、識らざるときは過失を見ざるが故に、斷つべからず。その次に或所縁を以て彼障より〔さる〕心解脱せるときは彼〔所縁〕は眞實なりと解了せざるべからず。その次に彼所縁によりて、彼障が滅盡となるに與つて力ある彼加行は對治の修習なりと知らざるべからず。その次に對治の修習には、所對治の衰滅と對治の増長とによりて分位あることを知らざるべからず。種性の分位等なり。その次に出世間法の現前するは諸果なり。預流果等なりと知らざるべからず。然るにそれら一切は尙有上なる故に菩薩と聲聞等と共なり。經中に説かれたるが如し。〔彼出家は聲聞の學處と行と行境と現行とを學ぶ。獨覺の學處と行と行境と現行とを學ぶ。菩薩の學處と行と行境と現行

ぶ」)。諸菩薩(すずし)の無上は不共にして第七義は無上なり。

餘人は言ふ。雜染と清淨との相に通曉することを生ずる爲に始めに相あり。その中雜染は障なり清淨は眞實なり。眞實性を了悟することによりて障を斷つこととなる。夫故に障と眞實となり。彼(障)を斷つ方便を顯示する爲にその次に連類を具する對治は道なり。彼道の始と中と終とに小中大の差別を顯示せん爲に彼(道)の分位あり。分位と相應して果を生ずる故にその次に果あり。これら一切は菩薩と聲聞等と共なり。夫故に不共なる大乘の理趣を示さん爲に乘無上ありと。(s. d.)

餘の人は云へり。有と無との相を知らしむるが爲に初めに相は説かれたり。相を知り畢りて障は斷たるべく眞實は見證せらるべきが故にその次に障と眞實となり。彼(障と眞實との)二を斷じ又見證する方便は此なりとて對治の修習あり。その中と勝とは分位の差別なり。彼(分位の差別)によりて斷たるべきものは果なり。その次に乘無上なりと顯示せられたり、故に此は次第[義]なりと。

又、心有無の法に迷ふによりて損減と増益とを斷つ爲に相の説示あり。迷を斷ち畢りては障に善巧する爲に障あり。彼(障)によりて眞實は障げらるゝ故に眞實に通曉する爲にその次に眞實あり。眞實を解了することを(すし)修習することによりて障は斷たるゝ故に眞實の次に對治の修習あり。その差別に通曉する爲に分位あり。分位によりて果の差別せらるゝことある故に、彼(果)にへの通曉を生ぜしむる爲に分位の次に果あり。これら一切は大乘に依る所なる故に乘無上は終に説示せられ

たりと。

(3)、「以下は相品第一偈の解釋にして、辯中邊論に「今於此中先辯其相、頌曰、

虛妄分別有 於此二都無 此中唯有空 於此亦有此」と云ふに關するものである」

その中相に關して

虛妄分別は有り、そこに兩者有るにあらず、

されど空性はこゝに有り、そこに又彼有り。

と説けりと云ふ。「その中」と云ふは相と障等の七物の説かれたる中、相に就いて言及せり。

虛妄分別は有り

云々と。教のあるがまゝに示すと云ふことなれば初めに相の説示ある故に、夫故に諸餘のものより先にそのものゝ説示を始むるなり。

「第一偈に對する解釋その一。」或者は一切法兎角の如く自性全く無しと思ふ故にその一切破棄「論」を遮する爲に「虛妄分別有り」と云へり。自性として〔*svabhava*〕と云ふ言外の餘意あり。かくの如くなるときは經中に一切法空なりと説ける故に經と相違するにあらずやと人云はゞ「曰く」相違せず。「彼〔虛妄分別〕中には兩者有るにあらずれ」ばなり。虛妄分別は所取と能取との自性と離るゝ故に空なりと雖も全無自性にはあらず。夫故に經と相違せず。若し、かくの如く「能取所取の」二は兎角の

如く全無、而も虛妄分別は勝義に於て自性として有るならば、爾らば空性は無となるべし（と人云はく）そは爾らず。「然し乍ら空性はこゝにある」が故なり。虛妄（うゑ）分別中に於ける所取と能取との無性は空性なる故に空性は無とならず。若し二無きは空性にして彼れ又虛妄分別中に有るならば、何故に我等は未解脫のものとして現に有り、（又かくあるとき）何故に「彼空性」を解了せざるやとの疑を遮する爲に「そこに又彼あり」と（著作者は）言へるなり。空性に於ても尙虛妄分別有る故に夫故に汝は解脫せざるなり。夫故に有垢なる故に清淨なる水界の如くには解了すべからざるなり。

〔第一偈の解釋その二。〕〔又は唯〕諸心心所あり。色と實性有とを見る〔見〕を遮する爲に「虛妄分別有り」と説けり。彼〔虛妄分別〕こそ實性として有り。色はそれより別には無く、實體として有る無し。何故なるか。「そこに兩者あるに非ればなり」。虛妄分別は何ものをも能取するにあらず、何ものをも取らるべき〔所取〕にあらず。爾らば云何、所取と能取とを離れたる事體のみ。何故なれば識以外に色等は取らるべきこと無く、夢等の如く色等として顯現する識起るなり。若し彼〔識〕に因有るときは彼〔因〕無くして彼〔識〕は起り得べからず。〔23〕夫故に所縁は無し、夢等に於けるが如く、餘處に於ても亦自の種子成熟するよりして外境として顯現する識起ると知るべきなり。所取無きときは能取は無たるべきが故に、所取無きとき能取は有り得べからず。されば色は虛妄分別より別に有るにあらず。若し爾らば所取（25）なきときは夫故に清淨の所縁なき故に解脫も亦なかる

べしと云はいそは爾らず。「空性はこゝにあるが故なり」の故に。tu の聲は yasmāt (何故なれば……故に) の義なり。實に空性は清淨の所縁あるものなり。そは所取と能取とを離れ虚妄分別中に有るが故に解脱は無とならず。若し虚妄分別中に〔空性〕あらば、彼〔空性〕は現に有るに何故に知られざるか。〔曰く〕虚妄分別のために覆はるゝによりて虚空の無垢なる如く知られずと雖も無なるが故に〔知られざるに〕あらずと示さんとして〔著作者は〕言へり、「そこに又彼有り」と。

〔第一偈に對する解釋その三。〕又は一切を損減することを遮する爲に「虚妄分別有り」と〔著者は〕言へり。識轉變の體として有る故に一切無にもあらず、自體有にもあらず。然るに若し人、色等の〔まのあたり〕見らるゝ如く虚妄分別より別に〔一切法〕自性として有りと思はんか、彼等に對して、〔その〕有るに非るものゝ増益を遮せん爲に〔著者は〕言へり、「そこに兩者有るにあらず」と。虚妄分別のみ有りとの意趣なり。或人々は〔能取所取の〕二は石女の子の如く無法なりと斷相を執り、他の者は内作の士夫無きは諸法の空性なりと言ふ、夫故に空性の損減を遮する爲に、又、眞無我を〔nānā〕知らしめん爲に、「而も空性はこゝに有り」と〔著者は〕言へり。若し〔この〕虚妄分別に空性あるならば、爾らば努力を須ひずして一切の有命は解脱すべしと人云はんか、そは爾らず。「そこに又彼有る」が故なり。何故なれば空性と雖も淨潔ならしめられざる限りは解脱無し。雜染せられたるものは大努力を以て淨潔ならしめらるゝが故に、無努力によりては解脱なし。

〔第一偈に對する解釋その四。〕或は又、雜染と清淨との相を説くことより餘無き故に夫故に雜染と清淨との相が解了せられん爲に「虛妄分別有り」と廣く〔著者は〕説けり。亂相の故に虛妄分別性は雜染なり。此が亂相なりと云何にして知らるべきかと云はゞ、曰はん「そこに兩者有るに非る」が故なり。自性として無なるに所取と能取との相として顯現する故に亂體として顯はる。今清淨の自性が解了せられん爲に「空性は此處にあり」と〔著者は〕説けり。兩者無き性なる故に空性の自性は清淨なり。空性によりて顯了ならしめらるゝが故に道と滅とをもこゝに攝するなりと知るべし。雜染分よりこそ清淨分は求めらるべしと雖も、獨自に別には無なりと示さん爲に「此處に」と云へるなり。若し兩者無くば彼「空性||淨分」有るに何故に世間は亂迷なるかと人間へるとき、夫故に「そこに又彼有り」と言へり。所取と能取との分別有るなり。幻は〔實の〕象(の)等としては空なれども象等として顯現するが如し。二の虛妄がそこに〔分別せらる〕、又はそれによりて虛妄は二に分別せらるゝ故に虛妄〔a, b〕分別なり。

(4)、〔第一偈の長行釋、漢譯にては

「論曰、虛妄分別有者、謂有所取能取分別、於此二都無者、謂即於此虛妄分別、永無所取能取二性、此中唯有空者、謂虛妄分別中、但有離所取及能取空性、於彼亦有此者、謂即於彼二空性中、亦但有此虛妄分別、若於此非有、由彼觀爲空、所餘非無故、如實知爲有、若如是者則能無倒顯示空相」に對する註」

虛妄の語は、こゝに所取及び能取として分別せらるゝ如くには無きことを示す。分別の語は、分

別せらるゝ如きその如き外境の有るにあらざるを示す。かくの如くして、所取と能取とより解脱せることがその相なることを説示するなり。爾らば彼〔分別〕は何ものなるか。過現未の、因果となり、三界に屬し、無始の時よりあり、涅槃にて盡くる生死に隨應する心々所は差別無く〔して云はゞ〕虚妄分別なり。差別しては所取と能取との分別なり。その中所取としての分別は外境及び衆生として顯現せる識なり。能取としての分別は我及び了識としての顯現なり。兩者は所取及び能取なりと云ふは、その中所取は色等なり。能取は眼識等なり。所取と能取との體よりの離性、離性は虚妄分別の空性なれども而も虚妄分別の無なるにはあらず。例へば繩は蛇の體としては空なり。彼〔蛇〕の自性に非る故に一切時に於て空性なりと雖も、繩の體〔空なるに〕はあらず。ここにも亦それと同じ。〔*sa-ic*〕そこに又彼有りと云ふは虚妄分別なり。かくの如く客の障によりて染まれるが故にそは水界等の如く分別すべからずと言はれたるなり。かくの如くそこに無きものは夫故に空なりと正隨見すと云ひ、何ものが何處に無しと云ふか。虚妄分別中に二〔は無き〕なり。夫故に虚妄分別は二として空なりと人は見る。然るに此處に所餘は有り。こゝに所餘は又何なるか。虚妄分別と空性となり。彼れ兩ながら〔*sa, a*〕此處に有りと無増益無損減に見るとき、實の如く知るなり。そこには虚妄分別を二無しと見る故に増益せず。虚妄分別と空性と有りと見る故に損減せず。空なるもの有る故に、空ある所以のもの〔能取所取〕はそこに無きが故に空性の相は無顛倒なりと示されたるなり。



然るに一切無又は一切有は空性の相が歪められたるなり。〔その時は〕空性は無となるべし。空と云はるゝものなきときは空性は有り得べからず。法性は物に依れるが故に、無常性等の如し。兩者（能取所取）有りせば空性は無なり。

若し兩者が兎角の如くなるときは云何にしてそれによりて虚妄分別の空性が可能なるか、例へば諸比丘の寺舎に於ける如く、實に他によりて（*antā*）他のものゝ空は見らるゝなり、と云はゞ〔それは爾らず。〕例へば繩又は幻は自性としては無くして蛇の相と士夫等の如く顯現す。其場合に或者の〔實なりとする〕執着を止息せん爲に〔彼に對して〕蛇と士夫等としては空なりと語らるゝ如く、その如く虚妄分別も亦自性無く所取と能取との相として顯現する時、諸愚者のそれに執じ現貪するを棄てしむる爲に二としては空なりと述べらるゝなり。

註

- ① 西藏譯の題號には此著者名見ゆ。
- ② 北京、ナルタン共に *rab-tu bstan* であるが *rab-tu bstan-pa* (*pradargya*)たるべきことを疑なし。
- ③ 兩版共に *tsom-pa-la* であるが梵本によれば *tsom-pa-las* なり。
- ④ 兩版共に *rnam-par mi rtogs-pa-lu* であるが、梵本にゆるに *rtogs* は *rtog* たるべし。
- ⑤ 兩版共に *te-las* なるも梵本によれば *de-las* たるべし。
- ⑥ 梵本に由る。

- ⑦ 西藏譯中邊分別論本論の歸敬偈にては *mchod-nas* を連續體なるが此處は兩本とも *mchod-pa* をなれり。
- ⑧ 兩版共に *bsgrim-par bya-bahi phyir* なるが梵本にあれば *bsgrim-par brtsam-byaho* たるべし *bya-bahi-phyir* は誤ならん。
- ⑨ 兩版共に *rgyur* なれど梵本によれば *rgyurho* なり。
- ⑩ 兩版共に *bcas-par bya-ste* を云ふが *bas-par* にては意味明瞭ならず、且つ又慈恩の述起にも「安立者施設言說之異名」とも云ふを以て、これは *bcags shes-bya-ste* をあるべきならん。
- ⑪ 兩版共に *dkyus-kyis* なるがチャンドラダース辭典には競馬場の西藏語として *dkyu-sa* をあるよりして *dkyu (s)-kyi sa* をすべきに非ざるか。
- ⑫ 兩版共に *shes-bya-bu-ni* なれど *shes-bya-bahi* たるべきを梵本の示す如し。
- ⑬ 梵本にのみある註釋文なり。
- ⑭ 相品第一偈の第一句「虛妄分別有」より第一一偈の第四句「亦七由虛妄」に至るまでを指す。
- ⑮ 第一二偈の空性に關する說以下を指す。此處の句につき北京版は *lhaḡ-mahi rnam-par byaṅ* を云ふ、ナルタン版は *lhaḡ-ma hiṅ-mas-par byaṅ* をあり、後者の *nam* の *s* なる添後詞は誤であらうが、何れにしても梵本の示す如く *lhaḡ-mahi* の次後に *phyed-kyis* をありたきものなり。
- ⑯ 兩版共に *de yan lha bu tsa gsum-no* をあれど他の六義の場合について此を見、又梵本によるに *de yan* の次後に *nam-pa* をあるべきなり。
- ⑰ 辯中邊論の西藏譯本論にも七義の項目が列舉せられつゝ、終に無上乘の名目が上げられたる次に漢譯二本には見えざる第七義なりとの語が加へられたり。安慧註の意よりすれば無上乘第七なりの語を以て此無上乘が最後にして餘なきことを表はすと共に、第七を述べたるその序數の力には第一第二を次第して七項の解釋せられざるべからざる意味ありと示さんとす。
- ⑱ 兩版共に *don bdi nams* をあれど梵本によれば *don bdi stwed-og* の語を想像し得。
- ⑲ 對治道詳言すれば對治道の種々の分位を経て障を斷ち得、眞實性を見證するを得たることが第六義の「果」であるとなすが、安慧造中邊分別論註釋梵文寫本の數葉について

此第三説の第一義以來の説明に見らるゝ處なるを以て西藏譯の如く、「(彼對治道の分位)によりて斷たるべきものが果なり  
des span-bar bya-ba-ni lhas-bu]」を云ふにては意味の上にて少しく相副はざるものあるやうに思はる。由つて若し梵本が  
吾人が先に訂正したる如くたり得るをすれば、「(彼(分位)によりて(障)を斷つことは(眞實を見證するなる)果を得ることな  
り」と解釋することが出來、瑣さか此處の文として妥當なるやうに思はる。

- ②① 兩版共に med-pyr なるが yod-par の誤に非ざるなきか。爾らずしてはその一文の意味に相違の生ずることとなる。
- ②① 兩版共に med-pa-ni na-yin-no なるも、梵本によれば med-pas-ni na-yin-no なるべし。
- ②② 兩版共に rtag-paḥi don-du なるも、rtogs-par bya-baḥi don-du 又は rtogs-paḥi don-du なるべきものと思ふ。
- ②③ 兩版共に kyan なるが梵本の示す如くんば kyi たるべし。

梵文校訂中質義の數々に對し畏友本田義英氏の懇切なる回答に接したること多し。茲に謝意を表す。

(昭和五年八月八日)